

【目的】 大きな目的は、第1報に同じ。本報では、近代日本における学校教育史の中の「手の働き」の位置づけを中心に整理し、本研究の概念と、後に続く調査までの経緯について言及する。

【方法】 近代日本における学校教育史の中で、基礎的な「手の働き」を教育する幼児教育、および小学校以降の「手の働き」に関する教育が行われたとみなされる家庭科、技術科、図画工作科の教科教育史より、その内容をひろいだし、考えを整理する。続いて本研究の問題意識に照らして、研究の概念を図式化し、調査の項目設定までの経緯を明らかにする。

【結果】 「手の働き」を意識的に教育内容に位置づけてきた教科は、小学校の手工科に端を発した図画工作教育と、小学校高等科における実業科に始まり、職業・家庭科から、技術・家庭科を含む家庭科においてである。工作教育については、時代が下るに従い、美術的色彩が強められてきており、技術・家庭科を含む家庭科においては、「手の働き」が中心的な課題になったことはなく、他の要因によって、理念が動きつつ現在に至っているのが現状である。従って、「手の働き」は、学校教育史の中で正当な位置づけがされてこなかったということができる。

今後、意識的に「手の働き」を学校教育を含めた子どもの生活経験に位置づけていくための研究の概念を図式化した。質問紙調査の項目設定については、現行の技術・家庭科の教育内容を中心に「手の働き」に関わるとみなした項目を抽出した。